日本教育新聞　平成20年（2008年）1月7日（月曜日）（毎週月曜日発行）

魅力伝えられる指導者育成を

山下泰裕・東海大学教授

武道は単なるスポーツではありません。「道」という言葉が付いています。これは、学んだことを日常生活で生かす、人生で生かすという意味です。

武道を体験することで、日本の伝統的な作法、礼法、また、日本人の心に触れることができます。武道ならではの、とても大切な部分でしょう。

武道を教える際は、「型」を通して、心を教えることが大事です。「型」を否定して、ただ楽しく武道を学ぶ授業は疑問ですが、「型」だけを学ぶ授業でもいけません。「型」を教える中から心を教えていくのです。これは、武道だけでなく、茶道でも同じことが言えます。

限られた授業時間の中で、何を教えるか。柔道の場合、一番の基本は、「受け身」です。転んでけがをする子が多くいます。受け身を習得できれば、痛くない柔道の授業、苦痛の少ない授業となっていくことでしょう。加えて、基本的な作法、礼法の指導は欠かせませんし、楽しいのは「乱捕り」です。

もっとも、限られた時間にどれだけ教えるかばかりを考えると、授業が窮屈なものになってしまいます。授業が終わっても一生、武道と接することができるように、つまり、生涯スポーツにつなげていくという視点から考えると、授業の組み立て方は変わってくるでしょう。生徒が「もっとやってみたい」と前向きな気持ちを持てるような授業を目指せばいいのです。

生徒が消化不良を起こすような授業ではいけません。また、教員からの一方的な指導でもよくないと思います。

武道は相手がいてこそ自分を高めることができます。そこで、相手への敬意、尊敬が大切になります。武道を通して相手を思いやる心が育まれます。依然としていじめ問題が深刻ですが、武道はできることであれば、小学校高学年から体験してもらいたいものです。

しかし、現実には武道を専門的に教えることができる教員は多くありません。他方、専門的に教えることができる教員は、鍛えることや技を教えることに目を向けがちになります。

武道を通して楽しく体を動かすことも大切ですし、学校の授業では武道への興味・関心を高めることに力を入れる必要があります。

柔道をはじめ、武道には種目ごとに競技団体があります。競技団体が中心となって、専門的知識が少ない教員が武道への理解を深められるよう、シンポジウムや勉強会、研修会などを開くことが求められます。

武道には「厳しい」「つらい」という偏見、先入観が生徒の中にも、指導者の中にもあるかもしれません。しかし、面白くなかったら、なぜこれほど武道が世界に広がるのでしょうか。選手としてトップを目指す人はごく一握りです。多くの人は、楽しいから武道に親しんでいるのです。体験してみれば、面白さが分かります。同時に、日常生活に生かせることが分かります。だから世界中に広まっているのです。

これまで、柔道、武道を経験した子どもが「きつい」「痛い」と、武道から離れていく事例も見受けられました。「型」や技、伝統的な指導方法にこだわるあまりに、結果として子どもたちの関心、意欲を失わせてしまっているのです。

今回の必修化を通して、子どもたちが武道の素晴らしさを発見して、その後の人生を通して武道に接したいという気持ちを持ち続けることを願います。そんな授業が求められていると思います。

武道の必修化には賛成ですが、条件があります。武道の指導でも最も大切なのは指導者です。指導者を育成することに関係者は十分な努力を払わなければなりません。（談）

【プロフィル】やました・やすひろ　昭和32年生まれ。柔道8段。ロサンゼルスオリンピックの柔道競技無差別級で優勝。58年からは東海大体育学部講師を務め、同助教授を経て平成8年から現職。政府の教育改革国民会議、中央教育審議会の委員なども務めた。

日本教育新聞

創刊 1946（昭和21）年5月1日
発行所
日本教育新聞社
〒105-8436
東京都港区虎ノ門1-2-8
電話03(5510)7777(大代表)
郵便振替　00150-8-196500
©日本教育新聞社 2008
ご購読申し込み　☎03(5510)7828　Eメール kodoku@kyoiku-press.co.jp
ホームページ　http://www.kyoiku-press.co.jp

N Web　このマーク表示のある記事については、ご愛読者に限り、ホームページ上でさらに理解を深めるための資料を閲覧することができます。